

心穏やかに、気長に、丁寧に

No 01
Special Report

Builder /
井坪工務店

Note /
南信地区 H邸
家族構成 1人

50年ぶりのふるさとで
自分のための時間を
のびのび過ごす家

ウッドデッキに腰掛けると、
木々の青葉と薪棚をすり抜けて
きた南風が頬をなでます。天竜川
とその両岸にできた街並みを見
晴らす高台で目線を上げたとき、
伊那山脈の向こうに見えるのは、
南アルプスの北岳、間ノ岳、仙丈
ヶ岳でしょう。深煎りの豆を手挽
きして淹れ、無造作にチタンカッ
プに注いだコーヒーを口に含ん
だとき、鼻へ抜けていく爽やかな
苦味に思わず頷いているのは、こ
の家を暮らすHさんです。

70歳を機に医療現場の第一線
から退いたHさんは、50年ぶりに
ふるさとこのまちに帰ってき
ました。医師になって以来ずっと
忙しかった日々から離れ、自然の
中で自分のための時間をのびの
び過ごそうと、この場所にこの家
を建てたのは、2026年3月の
こと。たまに家族もやってきます
が、今は一人で自適な毎日を送っ
ています。



コーヒーは飲むたびに豆から挽いて淹れる。手順の一つひとつが楽しく、そのひと手間が、味わいをいっそう深める。豆は、Hさんをコーヒー好きと知る知人が、よくプレゼントしてくれるという。

山で愉しむコーヒーと 家でたしなむコーヒーと

長らくの県外勤務からひさしふりにふるさとへ戻ることを決めたとき、やりたいことはいくつもありました。

まずは趣味の山登りやキャンプ。「引越すとき、だいふ人に譲ってしまった」そうですが、ウッドデッキの片隅にある納戸には、

使い込んで体に馴染んだシューズやバックパック、いくたびも山の夜を明かしたテントなど愛用の山用品が順番を待っています。「こっちにきて、まだ風越山にし

か行けていなくて。南アルプスも中央アルプスもあるし、他にもあちこち行ってみたいけど、熊が心配でね」

山へ行く楽しみの1つが山頂やキャンプ地で味わうコーヒーです。「むしろコーヒーを飲むた

めに山に行くのかもしれない」と話すように、どの山行にも、小分け真空パックのレギュラーコーヒーとドリッパーは必ず持っていていくのだとか。

もちろん、この家でもコーヒーを楽しみます。

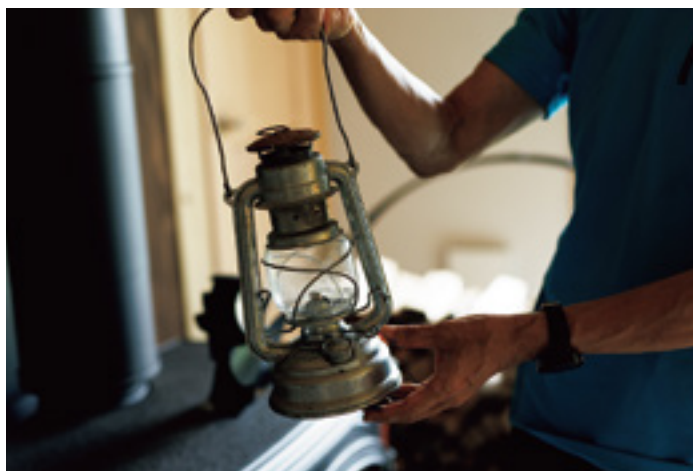
手動ミルを回すと耳をくすぐる豆が碎ける軽やかな音、細口ケトルから細いラインを描いてコーヒーの粉に注がれる湯、ネルドリップから立ち上がるアロマ、

山で使うのと同じチタンマグやシェラカップの取っ手に伝わる温もり、そして体も心も解きほぐしていく味わい――。

家で五感でたしなむコーヒーも、山コーヒーに劣らず格別です。庭の草刈りや薪割りに精を出した後に、長編の時代小説がひと区切りついたときに、そして、南アルプスの山並みを眺めるHさんの手には、今日もコーヒーのカップが握られています。



ウッドデッキは、物干しにも、薪置き場にも、庭仕事の際にも大いに活躍する。登山やキャンプで使うテントなどの道具を収納する納戸も備えた。Hさんは、愛着のある道具を使い続けることにもこだわる。





通り土間が玄関と土間リビングをつなぐ。構造材をはじめ、床や天井もスギ材を使用した清々しい空間だ。東向きのリビングやデッキからは南アルプスも望める。



木を生かした山小屋風の家に 紅一点の玄関ドア

自然のなかでのびのびと自分のための時間を使うために、この家づくりを任せたのは、ふるさとの知人の紹介で知った井坪工務店でした。「木を生かした小さな平屋で、土間とウッドデッキと薪ストーブがある、山小屋のような家」というのは、いかにも登山やキャンプ好きのHさんらしいリクエストです。

構造材にも屋内外の仕上げ材



にもスギをふんだんに使いました。玄関から薪ストーブのあるリビングまでを土間にしたので、外への出入りが容易。ダイニングキッチン奥の書斎と、玄関を入って左手に畳の部屋を備えたシンブルな間取りです。

実にアウトドア派の心を躍らせる造りで、使い慣れた山道具の手入れをしながら、次の山旅に思いを馳せずにいられます。しかも、「古民家っぽくなりすぎないように」と、玄関ドアを赤色にしたのが、まさに紅一点。心憎い、Hさんらしい遊び心です。





「大きな車だと無理ですが」と紹介されたこの土地の眺めが気に入った。「木を生かした山小屋風の住まい」に赤色の玄関ドアがアクセントをつける。伊那谷の自然を身近に感じながら、緩やかな時間が流れていく。



その山深い集落で、Hさんも中学を卒業するまで暮らしました。だから、この土地に出会ったとき、「母が導いてくれたような気がした」と言います。

50年ぶりに長野県に戻ったHさんには、アウトドアライフを満喫することの他に、もう1つ願いがありました。

「地域貢献なんて言うの大げさですが、郷里に恩返しができれば、とずっと思っていました」

外科医としてのキャリアにはピリオドを打ったものの、地域の病院に請われて、現在週に4日ほど内科医として勤務しています。

「他にもどんな形で地元のお役に立てるか、これから考えていきたい」と話します。

～近所さんとはすぐに打ち解けました。「草刈り機をどこで買えばいいか聞いたら、農協なら購入後のメンテもいと教えてくれました。デッキの物干しにぶら下げた玉ねぎも近所からのいただきものです。私も畑づくりを始めたら、いろいろ教えてもらうつもりです」

「ここに暮らし始めてから、一日を穏やかな気持ちで過ごせるようになったし、気長になったのか、家事も庭仕事も一つひとつ丁寧にするようになりました」。そう語るHさんの視線の先には、南アルプスとともに、あの熊伏山が広がっていました。



ずっと離れて過ごしてきた郷里に恩返しができたなら

この家を建てる何年前か前、Hさんのお母さんがまだご存命だったとき、この高台のさらに上にある公園を訪れたことがありました。そのとき、お母さんは遠くに見える山を指さし、「あれが熊伏山、もともと私たちの家のあったふるさとの山だよ」と教えてくれました。



お礼状など手紙は必ず万年筆で手書きする。若いころからの習慣だ。プラモデルは、息子さんの勧めもあって最近つくり始めた。仕事にひと区切りをつけ、ゆっくり本を読む時間もこれから取れそうだ。

